

「舢倉島での耳鼻咽喉科健診」 年1回の専門診療を通じて 島の人たちの健康意識を高める

石川県輪島市の北48キロ沖に浮かぶ



【定期船ニューへぐら】舢倉島と輪島港は、定期船の性能向上で現在1時間半で結ばれている。約30年前は2時間半、小森先生が初めて島に渡った20年前は1時間50分を要した

体に不調を感じても、よほどのことでない限り我慢してしまいがちでした。

そこで石川県は、島の医療環境を少しでも改善しようと、専門医による健診事業「舢倉島僻地総合診療」を年1回2日間の日程で実施。特に潜水漁のシーズンになると、耳や鼻、のどの痛みあるいは不安を抱える人が多いことから、耳鼻咽喉科健診については約20年前から継続して取り組んでいます。

金 沢市で小森耳鼻咽喉科医院を開業する小森貴先生は、舢倉島での耳鼻咽喉科健診に当初より参加。石川県立中央病院に勤務していた1983年9月、初めて舢倉島に渡りました。「ひどい船酔いに苦しんだ挙げ句、島に着くと今度は巨大な蚊に襲われて憔悴しました」。それでも、予定通りに健診を終えた結果、受診者32人中23人が耳鼻咽喉科疾患を抱えていることがわかりました。内訳は急性外耳炎8、慢性外耳炎9、中耳炎3、鼓膜炎1、その他2でした。「受診女性は26人全員が海女さんで、このうち何らかの耳疾患が認められたのは22人、85%と高率でした」

以来毎年、島を訪ねるようになった小森先生は、急性あるいは慢性の外耳炎の海女が多いため、その背景を調べました。「彼女たちが耳栓代わりに使う粘土の材質が良くないのではないかと疑いました。そこで、シリコン素材の耳栓を配布して経過を見たところ、

外耳炎がずいぶん減りました」

近年は、耳からのどへと診療の力点を移しているそうです。「耳疾患がかなり減り、のどを心配する人が増えたからです。もともと、男女とも喫煙率が高い土地柄ですから」。最近では、喉頭ファイバースコープを用いた検査が、副鼻腔X線検査やオージオメーターとともに不可欠となっています。

当 初、耳鼻咽喉科だけであった健診事業は、20年の間に眼科、外科(上部消化管内視鏡・乳癌・甲状腺検診)、内科(全受診者を対象に血圧・血糖測定、検尿、心電図検査)、心療内科が加わり、年々充実してきました。「健診継続の成果は、専門医療の提供もさることながら、島の人たちが自分たちの健康に関心を持つようになったことだと思います。昨夏は、漁期のなか、健診日を沖休み(漁に出ないこと)にして私たちを迎えてくれましたから」と小森先生。年に1回とはいえ、島の人たちが専門健診を必要とし、積極的に支持してきた様子が見えがうかがえます。

「じつは開業した年、島への健診を断念しかけました。開業後は勤務医時代と違って、時間や立場上の制約から参加が難しいと考えたからです。しかし、どうしても島に行きたいという思いが強かった。島の自然、島の人たちが本当に魅力的だからです」。毎年夏の健診が近づくと、小森先生の心はわくわくしてくるようです。



【舢倉島での耳鼻咽喉科健診】漁業に携わる大人だけでなく、同伴の子どもらも受診にやってくる。「20年前に診療した5歳児は、今年25歳。光陰矢のごとしです」と小森先生



小森 貴氏
小森耳鼻咽喉科医院 院長

舢 倉島は、輪島港から航路1時間半の日本海上にあります。周囲6km、最高海拔12mの小さく平坦な島は、昔からアワビや海草を採る「海士の島」として名高く、漁師や海女は舢倉島と輪島市の両方に居を構えています。島の人口は、漁で賑わう夏でも200人余り、冬は50人に満たない状況です。

このため島の医療は、唯一の医療施設である舢倉診療所に託されています。しかし、自治医科大学から診療所に派遣される医師の任期は半年から1年、また医師の専門分野も異なるため、継続性を伴った専門医療が受けられません。その結果、島の人たちは

表. 舢倉島における医療の歩み

1955 (昭和30) 年ごろ	舢倉診療所開設 (初めて医師が常勤)
1979 (昭和54) 年	医師の死去により無医島に
1981 (昭和56) 年 夏	疋島一徳医師 (自治医科大学1期生) が初代診療所長として着任 (以降、自治医科大学卒業生が交代で診療所に赴任)
1983 (昭和58) 年9月	小森貴医師が島民健診で耳鼻咽喉科診療を初実施
1984 (昭和59) 年	島民健診に眼科が加わる
1985 (昭和60) 年	診療所が、島に建設された総合開発センター内に移転
1988 (昭和63) 年	島民健診に外科が加わる
1989 (平成元) 年	島民健診に内科が加わる
1998 (平成10) 年	島民健診に心療内科が加わる